

災害と外国人

—母国に「逃げる」ことを中心に—¹⁾

郭 基 煥

1. はじめに

地震発生から1週間ほどがたった頃、あるツイッター上では、避難所となっていた仙台市のS中学校について、不穏な投稿がなされた²⁾。それによれば、S中学校には多くの中国人・韓国人が避難しており、中国人が支援物資を根こそぎ運び出したり、体育館の中でトマトの皮を吐き出したりなど「やりたい放題」にしている。そのように書いた「投稿者」は、さらに次のように続けた。「木刀を持っていく。味方、求む」。これに対して同調する投稿が次々と掲載された。

もっとも、それがまったくのデマであることは、同じツイッター上で他の投稿者により即座に指摘されており、また東北の地方新聞によっても早い段階で、デマに警戒するようという呼びかけと共に、指摘されている³⁾。デマであることは避難所の関係者はすぐにわかったはずであった。なぜならS中学校は、3月13日に電気が復旧した際、校舎の一部に火災が発生したため、翌日には閉鎖しており、投稿者が投稿したときには、すでにそこには誰も避難してはいなかったからである⁴⁾。投稿者は拍子抜けするほど軽率だったと言わねばならない。

この軽率さは、ある種の暗い情熱の結果だったことだろう。実際、投稿者が、エスノセントリックな暗い情熱に掻き立てられていただろうことは、軍国主義を想起させるような「木刀」を持ち出していることからもうかがうことができる。

しかし、外国人、特にアジア系外国人を各種の犯罪と結びつける言説の発信者や媒介・拡散者をこの種の暗い情熱の持ち主に限定するとしたら、おそらく事態を矮小化しすぎている。震災以降、被災地では、特に沿岸地での犯罪と危険について眉をひそめて語ることは、ごく日常的な風景と化しているようにさえ見受けられる。そしてこの話題は時に、予定調和的に、一層の小声で、犯罪の主体として外国人を名指したり、暗示したり（「日本人とは思えない」）することで、終わる。

震災以前において既に、「外国人」という記号と「犯罪」を連結させた「外国人犯罪」なる表現が、リキッド・モダニティの現代における「社会的絆の弱さ、流動性から生じる実存的不安」（Bauman

1) 本稿は第104回公共哲学京都フォーラムでの筆者の報告を基に、若干の加筆修正を施したものである。

2) 詳細については萩上（2011：50-52）参照のこと。

3) 3月20日、河北新報。

4) 当避難所の責任者であった当校の校長、及び彼をサポートした町内会長によれば、避難所であった3月11日から3月14日までの間、S中学校には1000名以上の避難所があり、そのうち5割程度（校長）ないし8～9割が外国人であった。これは学校の近くに大学の留学生のための寄宿舎があるためである。避難所期間中の中学校における「外国人」の様子の実際は、「きわめて整然としていた」（校長）し、日本人と外国人の間のトラブルも「知る限り、まったく起こっていない」（町内会長）。【校長聞き取り：7月19日、S中学校、会長聞き取り：8月3日、会長自宅】

2000 = 訳2001 : 142) を背景に、一つの日常的な記号として定着していたことを考えれば、社会と生の一層のリキッド化を予想させる今回の危機に際して、こうした言説が日常化することは、さほど不思議なことではなかった、といえるかもしれない。もちろん、「客観的」で、統計的な「事実」が公表されていない現段階では、この言説を事実無根のデマと見なすべきか、ごく一部の「事実」⁵⁾に対する過剰な一般化であると見なすべきなのかを論じることはできない⁶⁾。しかし、言説によって指示されている「現実」かどうであろうとも、「外国人犯罪」言説は、当の外国人にとっては、時として対処しなければならない環境、あるいはひとつの現実たらざるを得なくなることは予想される⁷⁾。

「外国人」にとって震災時の環境にはこのような困難なものばかりではなく、一見したところ、アドバンテージのように見える要素もある。それは、とりもなおさず、危機にあって、「母国に帰る」という選択肢を持っているという点である。実際——これも今のところ、数量的なデータは持ち合わせていないが——被災沿岸地に居住する外国人技能実習生の多くが政府の支援によって帰国したし、仙台市内の外国人も多くが一時帰国している⁸⁾。しかしながら、一見したところアドバンテージである要素は、そうした場所を国外に通常は持たない日本人の側から見ると、しばしば「運命」を共有していない「よそ者」として外国人を見なす根拠のひとつともなりうる。シュッツの表現を借りれば、外国人はしばしば「疑わしい忠誠心doubtful royalty (Schutz 1964 : 104)」の持ち主として見なされる。

たとえば、朝日新聞では発災から10日ほどのちの3月20日付の『天声人語』で、多くの外国人が日本脱出を急いでいると指摘し、「物心の支援に感謝しつつ、この国は自らの手で立て直すしかない胸に刻んだ」と述べ、さらに「大戦の焼け野原から立ち上げたこの国において、私たち

5) 仮に日本以外のある国の人がこの種の犯罪を「現実」に犯していたとしても、そこから「外国人犯罪」を「事実」と見なすことは、恣意性を帯びていることにも注意すべきであろう。その犯罪者は同時に「男性」、住所不定者、無職者など他の社会的なカテゴリーを帯びているかもしれない、常にこうしたカテゴリーで捉えることも可能である。日本人による犯罪が生じたとき、こうしたカテゴリーが通常、用いられる（「日本人犯罪」というカテゴリーではなく）一方で、外国人犯罪については、この種のカテゴリー化は行われず、という不均衡がある。この意味では、「外国人犯罪」は常に実際の統計がどうであれ、社会的に構築されたものであるという性格を帯び、「事実」からの余剰を含む。

6) 宮城県警及び数箇所の沿岸地の警察署は、早い段階から、これらの言説がデマであり、惑わされないようにというPRをホームページ上で行っている。事実関係について、私が電話で問い合わせたところ、宮城県警、南三陸警察署、石巻警察署は「回答できない」との答えであった。ただし、気仙沼警察署は、警察では外国人犯罪についてはまったく把握していない、との回答を得た。また、石巻警察署も、外国人による遺品からの金品奪取については、まったく把握していない、との回答を得た。本報告では、こうした言説の全体像を論じることはできないし、言説の背後にあるものを社会心理学的に分析することもできない。

7) 災害時において外国人が情報の入手困難等の理由により「災害弱者」になりうることの指摘は阪神淡路大震災以来、指摘されており、「多文化共生」のプロジェクトの枠の中でその対策が考えられてきたし、今回の震災時も多言語情報発信などの外国人に対する支援体制は早い段階から整えられてきた。しかし外国人犯罪言説を考慮するとき、多文化共生の観点から考えなければならない問題として、外国人に対する情報の不足と同時に外国人をめぐる情報の過剰という課題が浮かび上がってくる。

8) 日本人にもトランスナショナルな移動という選択肢があることはもちろんだし、実際、調査者の聞き取りによれば、少なくない日本人が韓国に避難していた模様である。しかし、滞在コストなどのため、こうした選択肢を実際に選ぶ人が限定されていることは言うまでもない。

に帰るべき場所はない」と結んでいる⁹⁾。この感動的な決意表明は、同時に、「帰るべき場所」のある「外国人」が、そうである限りで、日本人とは運命を共有しないよそ者であることの承認であろう。ここではどこにも外国人の帰国を非難することばはない。その意味では外国人をむしろ寛容に「よそ者」として位置付けている、といえるかもしれない。なるほど、それは先の暗い情熱の持ち主が攻撃的に外国人（特に中国人）を「よそ者」として位置付けるのとは対照的であるが、表象上の位置としては等しい。

このように、外国人の帰国は、日本人に「外国人」をよそ者として見なす表象を再想起させ、再強化する機能を果たしうるだろう。そうであれば、特に当の外国人が日本社会、あるいは自分が所属する地域社会や、自分が関わる人間関係のネットワークに深くコミットメントしている程度に応じて、自分がアドバンテージを持っていること、さらにはそのアドバンテージを実際に利用することは、当の外国人に心理的な葛藤を引き起こす材料となることも予想される。

それを意識した外国人に日本にいることの居心地の悪さを与えるだろう外国人犯罪言説もやはり〈「運命」を共有していない「よそ者」〉という表象によって支えられているように思われる。同時に、(一時)帰国の選択は、この〈「運命」を共有していない「よそ者」〉という表象を日本人に再確認させる結果にもなりかねない(と意識されるだろう)。事態をこのように考えるとき、震災以降の外国人の置かれた状況は、ある種のダブルバインド的なものとして考えられるように思われる。では、外国人は実際に、このような折り重なる困難を経験したのだろうか。また経験しているとしたら、どのように経験したのだろうか¹⁰⁾。

2. 「逃げ出した者」という意識——韓国人留学生の事例¹¹⁾ から

韓国からの留学生Cさん(男性、25歳)は、地震発生後、避難所で一泊したあと、自宅アパートで寝泊りする一方で、昼は多くの時間を領事館で過ごしていた¹²⁾。そこで、彼は、自身が所属する大学の教育学部の職員から、外国人犯罪の噂が回っていることを聞いた。彼は、その噂を信じる日本人がそれほど多くはない、と信じ、なるべくそれについて考えないようにしていた一方で、「外国人への暴行や嫌がらせ」に対する不安を感じていた、と言う。

ただし、彼の場合、この不安は、噂を聞いたことによってもたらされたわけではなかった。噂

9) この新聞記事をはじめ震災後の外国人についての言説をめぐっては、東北大学国際高等研究教育機構助教の李善姫が多文化関係学会(2011/9/11)で詳しく分析しており、また、それに前後して行われた筆者を含む共同研究(「震災と外国人」)プロジェクトの研究会において発表しており、そこで彼女から多くの示唆を受けた。感謝したい。

10) 筆者は6月以降、外国人が震災をどのように経験したのか、聞き取り調査を行っている。本報告はその調査を元としているが、調査は始まったばかりであり、また、対象者は未だ7名に過ぎない。さらに地域的には仙台市在住者が6名(ほかに石巻市1名)であり、職業的には留学生が3名(ほかに韓国食堂経営の夫妻2名、主婦1名、スナック勤務1名)であり、沿岸地に多い外国人実習生を含んでいないことを考えると、相当に偏っている。したがって、ここでは、外国人の震災経験の全体像を示すには程遠い。本格的な調査のための予備的調査として理解していただきたい。

11) 聞き取り:2011年6月17日、東北学院大学

12) 仙台市内の韓国領事館には震災後、多くの韓国人が情報の収集、食料の確保のために訪れていた。また一時帰国希望者が帰国するまでの間、寝泊りするスペースを提供していた。

を聞く以前、既に震災後、避難所にいるときから、そうした不安（「外国人に対するプレッシャーのようなもの」）を感じていて、韓国人同士で話し合うとき、声をなるべくひそめるようにしていた、と言う。いわゆる「身元隠しpassing」である。

不安はなぜもたらされたのか。彼の場合、その理由の一つは「関東大震災時の出来事が頭に思い浮かんだ」ためであった¹³⁾。彼は、今の時代にはない、と思いつつも、どこかでそうしたことがまた起こるのではないか、という不安を持った。なお、1923年の状況の再来に対する不安は、この聞き取りをしたとき同席した別の韓国人Kさん（自分自身、被災し、避難所暮らしを経験している）も持ったものであった。もっともKさんがそうであったように彼もまた実際に「嫌な経験をしたことは特になかった」。

1923年の出来事がトラウマのような形で想起されたのは、なぜか。それは真空の状況で生まれたわけではなかった。彼は自分が留学初期の学部時代に言葉のことばのことで学校の友人にからかわれた経験があった。彼には、この種の「小さな経験」がいくつかある。それでも震災まで、彼は自分自身に対して、「こんなことはたいしたことではない。自分は勉強するために来たのだから、しっかり勉強すればよい」と思い込ませてきた。しかし、それが「地震によって急に大きくなった」のである。抑圧してきた不安が地震を機に解除された形であった、といえるかもしれない。

彼は3月17日には、韓国に一時帰国している。帰国することを決めたのは、友人や、彼が通う教会の人たちに強く勧められたからであった。彼はこの期間、日中は領事館で多くの時間を過ごしていたが、他の調査対象者からの証言もあった通り、ここでの雰囲気は、帰国は当然であり、「帰らないと、周囲の人から変な人のように見られた」。ただ、彼は「最後まで100%帰りたくなかった」。理由は、帰れば、自分が所属する大学院研究室の教授に「どんな目に合わされるか、怖かった」からである。彼は「大事なときに逃げ出したら、どんな「罰」があるのか」という怖さを持っていたのである。

彼は他の一時帰国者などと比べて、相当早いと思われる10日ほどのちには、再来日しているが、そのときには、教授に「逃げた人、と真剣に怒られた」という。このような発言からは、帰国をとどまった動機、そして早期に再来日した動機に研究室の教授の存在が極めて大きかったことをうかがわせるが（彼は聞き取り期間中、彼のことを「ボス」という言い方を何度かした）、同時に研究室という所属する集団の一員としての、さらに理系の人間としてのアイデンティティから生まれるある種の規範意識が働いていたとも推察される。というのも、彼が地震発生直後に取った行動は建物の階下にあった実験装置の様子を確認することであり、それは「理系の人間なら、当然のこと」だと言うのである。

彼は再来日後、数度にわたって、ボランティア活動を実施している。理由は、「逃げ出したものとして申し訳ない気持ち」があったからだった。なぜだろうか。

彼は教授を恐れつつも、「ボス」という言い方で彼を揶揄することを忘れないし、所属する集

13) 周知の通り、1923年の関東大震災のとき、朝鮮人が井戸に毒を注いでいるなどのデマが起り、多くの朝鮮人が虐殺される惨劇が起こっている。

団への帰属意識を表明しつつも、自分は「こいつらとは違う韓国人だ」という意識を常にもっていることを感情を押し殺したような語調で語っている。そうした語り、そして語り口調からは、所属する集団に対する帰属意識はむしろ自分の将来のための、ある種の「通過儀礼」的なそれとして半ば演じているものであるようにも見える。かといってまた、彼はもはや韓国という社会の素朴な一員でない。二重の文化によって鍛えられた「苦々しい慧眼grievous clear-sightedness」(Schutz 1964: 104)の持ち主でもある。というのも、彼は、震災直後に教会に集まった他の留学生が近所の韓国食堂に行ったことについて極めて不合理であると非難し、また領事館でテレビのニュースを聞くとき周囲の韓国人がうるさかったことも——おそらくは——同じ観点から非難しているのである。

こうした語りからは、合理的であることを重視し、そうであろうと心がけ、合理的な理由がないのに他人に同調することを拒否する合理的個人という姿が見えてくる。彼に対してこうした人間像をいったん描いたとすれば、彼の語りのほとんどすべてがそのような人間像に符合させて解釈することが可能である。彼はボランティアを行う際、仙台市内で被害がもっとも大きかったところを調べ、若林区のセンターを経由して、活動を行ったが、それは数度ですぐにやめてしまった。理由は、震災とは無関係な草むしりや庭掃除のようなボランティアだったからである。つまり、彼によれば、それは活動の依頼者が「震災を利用してボランティアを利用していたように見えた」からである。彼にあっては雰囲気にもまれてボランティアを行うことはなかったのである。またこの「苦々しい慧眼」の持ち主は震災時の研究室の人たちの態度についても、「相変わらずマニュアル好きで、頭が硬い」と冷笑的に語る。

しかしこのような合理的個人という人間像を描くとき、「逃げ出したものとして申し訳ない気持ち」はどのように解釈すればいいのだろうか。それは誰に対して、何に対して思ったのだろうか。所属する研究室や「ボス」に対してだろうか。であれば、なぜこの気持ちがボランティア活動につながったのだろうか。危機に際して、もっとも安全と考えられる場所に避難することは、人間にとってもっとも基本的な権利であり、自由であり、また合理的な判断として考えられるものであろう。彼の場合、あらゆる場面で合理的な判断を重んじるか、状況がそれを許さないときは、シニカルに合理的な批判のことばを向ける。こうした態度からは、「逃げ出したものとして申し訳ない気持ち」はまったくそぐわないように見える。この気持ちはどこから生じ、またそこからは何を読み取ることができるのだろうか。

3. 「母国」が落ち着かない——他の事例から

筆者が調査した6名のうち、上のCさんを含む留学生3名は全員がボランティア活動に参加している。特記すべきことは、その三人が共通して、母国への一時帰国したことについて「申し訳ない」という感情を持ったことである。

韓国人留学生（女性）Yさん¹⁴⁾は、地震発生後、教会に行き、ついで、牧師及び他の信者（多く

14) 聞き取り：2011年6月23日、東北学院大学

は留学生)と共に韓国食堂に歩いていき、そこで一泊した。彼女は、その翌日から数日間、主に領事館で生活したあと、特に領事館と一緒にいた友人からの強い勧めがあって、韓国に帰国した¹⁵⁾。

しかし、母国への一時帰国は、彼女を安堵させるものではなかった。韓国にいる間、彼女は、やはり「申し訳ない気持ち」とらわれていた、という。安全な場所が、彼女にとっては、むしろ、落ち着かない場所だったことになる。そして再来日後、彼女もまたボランティア活動に従事している。活動は主に教会関係者と共に行った。瓦礫撤去作業とキムチやチヂミの提供などである。キムチを自衛隊の人にも提供した、という話もしてくれた。彼女はボランティア活動を繰り返し行っていたが、一度、実際に見た被災地の様子がテレビで見る映像とはまったく違うことにショックを受けたからだった。

中国人留学生Wさん(女性)¹⁶⁾も一部でCさんとよく似た経験をしている。彼女は震災後、彼女がアルバイトをしていた大学内機関の先生の自宅に避難し(2泊)、その後は友人宅に他の留学生と共に泊まった。数日後、やはり原発の影響への恐れから、一時帰国したが、その直前に指導教官にメールを出したところ、「帰国するのは無責任だ」という内容の叱責を受けた、という。もっとも彼女はこれに対して、「一緒にがんばろうと思ったけれど、先生からの初めてのメールがこんなものとは思わなかった」という内容に始まる長いメールを送った。概略は次のとおりである。「原発のことも誰からも説明もなかった。安全と言っても次々に爆発していた。中国の親が心配して泣いていた。食料も足りなかった。ここにいれば、日本人と食料の競争になる。いたら、先生は私をケアしていたのか」。長いメールが功を奏したらしく、そのあとの先生の対応は「優しかった」という。また、日本に戻ってきたら、「帰ったのはよかった」と言ってくれた、という。

それでも彼女もやはり帰ったことについて「自分では申し訳ない、という気持ちがあった」と語っている。そして彼女もまたボランティア活動に加わっている。彼女の場合、母国にいる間に募金活動を行い、女川町に送金した¹⁷⁾。また再来日後は5月中旬に2度、他の留学生を組織して、団体で若林区の瓦礫撤去作業を行っている。ボランティアを行うことは、中国にいたときから既に考えていた。理由は「悲惨な状態を放ってはおけない」であった。

外国人犯罪の噂については、彼女の答えは、「知らなかった」である。また外国人であることのために不快な経験を、ということもなかった。彼女の場合、逆に震災後の物資不足の時期、スーパーで買い物をするためにレジで並んでいたとき、たまたま前にいた日本人の中年女性が、

15) したがってほとんどの時間を韓国人同士で過ごしていたせいであろうか、Cさんとは違い、自分が外国人であることを悟られないようにするようなことはなかった、という。また、再来日後に、外国人犯罪の噂は聞いたとき、「社会全体が差別的な雰囲気になるのではないか」という不安をもった、と言う。その意味では本文で指摘した「居心地の悪さ」を予想的に感じている、といえるだろう。ただし、彼女の場合、普段の身近な人間関係から、自分自身が嫌がらせを受けたりする、ということは感じたことがない、という。

16) 聞き取り：2011年6月24日、東北学院大学

17) 女川町では震災時、同町の大手水産加工業者である佐藤水産の専務が自社で働く中国人実習生を全員、高台に避難させた後、自分だけが港のほうに降りていったあと、亡くなるという事件があり、このことは中国のメディアでも大々的に報道されていた。このことはWさんも知っていたが、そのために女川町に送金をした訳ではない、という。郵便を介しての送金が可能な市町村が限定されていたからだ、と言う。

支払いをしてくれた、というエピソードも教えた。Wさんが中国語で友人と話しているのを聞いて、中国人と知った中年女性は、「たいへんでしょう」と言って、支払いをしてくれたのである。

ボランティア活動の実践や教員との「本音」(?)の付き合い、中年女性のエピソードなどを知ると、彼女は一見、日本に対して好意的な感情を持っているように見えるが、「親日家」などというカテゴリー化はあまり適切とは思われない。震災前と後の日本人に対するイメージを聞くと、むしろ突き放したような呆れ顔で、こう言った。「相変わらず、冷たい」。こういう言い方を見ると、Cさんもそうであったが、彼女もまたどこかに、日本人に対して、過剰な期待を抑制した、冷やかな観察者としての立場に立っているように見える。こうした人間像を描くとき、やはりCさんに対するのと同じ疑問を持たないではいられない。「申し訳ない」という気持ちはどこから生まれ、何を意味するのか、という問いである。

聞き取りをした中には、上記三人の留学生以外にも、類似する感情を抱いた人がいた。仙台市内で韓国食堂を経営する夫妻（共に韓国人）の妻である¹⁸⁾。夫婦は韓国食堂を営む一方で、二階建て自宅の一階でキムチの製造販売を行っている。夫婦、特に夫のPさんは強固とっていい韓国人アイデンティティを持っている¹⁹⁾ことは、自宅前に常に大極旗が掲げられていることがこの上なく雄弁に物語っている。食堂には以前、竹島（独島）問題がメディアで盛んに報じられていたとき、匿名の電話がかかってきて、「朝鮮人は朝鮮に帰れ」などと怒鳴られたことがあったが、Pさんは「言いたいことがあるなら、顔を見て話せ」と言い返した、と言う。とはいえ、彼の場合、強い韓国人アイデンティティは日本人との距離を広げるように作用しているわけではなかった。日本人との関係は良好であり、自宅でとれた野菜を届けてくれる友人もいるし、近隣の人たちからは自分たちが町に来てくれたことを感謝してもらっている、と言う²⁰⁾。夫婦は震災発生時に店に教会の信者たちに食事を提供し、宿泊もさせたのみならず（中国人のアルバイト店員も宿泊させた）、自宅前では残っていたプロパンガスがなくなるまでキムチやチヂミを、道行く人々にほぼ無償に近い値段で提供していた。上記三人の留学生はいわば制度化されたボランティアを行っていたわけであるが、それとは対照的に、この夫婦は、自分たちのおかれた状況の中で、自分たちのアドバンテージをフルに活用して、非制度的な——むしろ語の本来の意味に近いだろう——ボランティアを行っていた、形であった²¹⁾。

夫婦は数日後には帰国をする。領事館で他の留学生などから、「帰ってくれないと自分が心配だ」と強く勧められたためであった。夫婦は二か月ほど、韓国に滞在した。しかし、その間、妻

18) 聞き取り：2011年7月20日、自宅。この男性の食堂が多くの教会に通う韓国人留学生が震災発生日に訪れた店である。

19) この男性への聞き取りは、後半の三分の一近くが、在日韓国人や日本生まれの韓国人が韓国語をしっかりと話さず、学ぼうとしないことへの批判であった。

20) 彼は「年をとってきて、何が大事かわかってきたんだなあ。人の関係だ」と話していた。

21) こうした「非制度的なボランティア」についていえば、石巻市在住の主婦（同時に大学非常勤講師であり、女川町の実習生の「教育係」でもあり、さらに宮城県国際交流事業においてさまざまな役割を担っている）もまた実践していた。彼女は石巻市の避難所に2週間余り、避難していたが、その間、家にお米を炊いて、避難所に持ってきて、自分の子供の同級生の父兄たちと共に、他の避難者たちに提供していた。彼女は3月25日に帰国したが、それは避難所で吐血し、病院でも有効な薬が手に入れられなかったためであった。

のAさんはむしろ「落ち着かなかった」と言う。そして「仙台に戻ったら、逆に楽になった」。

以上のように、筆者が聞き取りを行った人たちの多くは、様々な形で制度的もしくは非制度的なボランティアに関わっていた。そして注目したいのは、多くが一時帰国したことに対して「申し訳ない」感じを持ったり、安全であるはずの母国に在ることに対して、落ち着かない感じを持ったりしていたことである。また、それがボランティア実施の動機の、少なくとも一部をなしているか、(非制度的な)ボランティアの実践者においてこの感覚が見られる、という点である。

4. 倫理的な自己審問の源、ある特殊なトポフィリア

一時帰国したことに対する「申し訳ない」という感情は、安全を求める身体としての自分とは別に、そのように求める自分を責め、審問する別の視点が成立していることを意味している。言い換えれば、安全を求める身体としての生を再帰的に眺める「超越的な視点」が成立している。では、この視点はどのようにして生まれたのだろうか。

ここでCさんに限って考えれば、想定される回路は、こんな大事なときに逃げるべきではない、と彼に叱責した「ボス」の視点の「内面化」である²²⁾。つまりボスという具体的な他者がその具体性が消去されて、超越的な視点に取り込まれ、その声が鳴り響いていた、という解釈である。聞き取りによれば、この「ボス」の見方を、周囲の人とは異なり、彼の父親は基本的に賛同していた、という。そうであれば、帰国を責めていたは、父—ボスの声として解釈されるかもしれない。

しかしこうした解釈はそれを認めたとしても、帰国を審問する父—ボスの声がなぜ特権化したのか、という問いに送り返されるのではないだろうか。思い出すべきは、この「苦々しい慧眼」の持ち主は、所属する集団とその規範に対して一定の批判的な、もしくは「批評的」な距離を置いていることだ。さらに彼は自身が参加したボランティア活動に対しても、「批評的」な距離を置いていた。であれば、帰国を審問するのが、父—ボスの声だとしても、それに対しても「批評的」な距離を取ることも可能だったはずなのではないだろうか。たとえば、避難の帰国に関して、自宅前に韓国の国旗を掲揚しつつ、近隣の人との良好な関係を保つ韓国食堂経営者夫婦のうち夫のPさんは、一時帰国したことについてどう思っているか、と尋ねたとき、日本人が自分の近くの避難所に行くのが当然のように、韓国人が自分の国に避難するのは当たり前だ、と強い語調で答えている(そして、「近所の人にも今度、何か起こったときのために、韓国と一緒に使える避難所を作っておきましょうか、と冗談で言っている」と話した)。Cさんの中で、他ならぬ避難の帰国に対しては、この種の判断が中断されたのはなぜか。

ここでありうる回答は、父—ボスの声はそれが鳴り響いたとしても、触発の役割であって、伝

22) こうした見方は、フロイトの超自我をめぐる議論やアルチュセールの「イデオロギーの呼びかけ」の議論、またそれらの議論をジェンダーやアイデンティティの問題と接合させたバトラーの議論によって支持されるだろう。したがって本格的に論じるには、こうした議論の参考が必要である。また、それを基に、危機における超越的視点としての良心の生成について考察することは興味深い。しかし、ここではこれらについて論じることは到底、できない。この報告では、聞き取り内容に即して、その範囲内で考えられることを論じてみたい。

えられる沿岸地の悲惨さそのものが彼を責め、審問した、というものであろう。これは、おそらくレヴィナスであれば、支持する回答であらう。彼は言う。

他者の現前は自由の前批判的な正当性を審問するのではなからうか。自由は自己への恥辱として自分自身に現れるのではなからうか。(Lévinas 1961=訳1989: 466)

もちろん、ここで言われている他者の現前は具体的な他人が知覚される状況を指している。しかし、レヴィナスにとっての他者は常に「弱さ」や異邦人性によって特徴付けられる。彼は、目の前に現れる人に見えてしまう「弱さ」や異邦人性が、無邪気に自由を行使し続ける「私」を審問するところに「主体」の成立を見る。

であれば、あの日以来の沿岸被災地とレヴィナスのいう他者を結びつけて理解することはあながち不当ではないだろう。沿岸被災地の状況に見えてくるのは、あらゆる意味が無化されて、むき出しになった存在であり、人や社会や文明の、あってはならない弱さ、あるいは儂さではなかったか。

Cさんであって、沿岸被災地はレヴィナスが描くような他者として現れたのではないだろうか。つまり、沿岸地はそれ自体として、自分を守ってくれる社会的な意味づけを失った、あるいはそうした意味づけのかなたにある、他者の根本的な弱さに相当するものとして現れたのではないだろうか。そしてこの現れ方が、彼に祖国への避難という、権利上は何ら非難されるべき理由のない自由を、審問させたのではないだろうか²³⁾。

ここではこれ以上、こうした解釈を正当化していくことは難しい。しかし、仮にこうした解釈が可能だとしたら、加えておきたのは、もちろんそれは外国人にのみ当てはまることではない、ということである。というよりも、おそらく私たちがもつ常識に沿って言えば、むしろ逆の順序で述べるのが適切かもしれない。すなわち、被災地の様相がひとつの他者として迫り、自己の安全や自由に対する素朴な権利感覚を揺さぶるという倫理的な審問は、日本人のみに起こるのではない、と。

冒頭で筆者は外国人に予想される様々な困難について述べた。それについて簡潔に述べておけば、こうなるだろう。まず外国人犯罪については、それを現実に聞いていない場合でも、特に韓国人の場合、関東大震災の出来事が思い出されることで、なんらかの不安を覚える場合がある、ということである。この知見からは、多文化共生社会の構築のためには、長期にわたる解決の努力が求められる困難な課題があることが示唆される。

次に、帰国という選択肢を使用することが、運命を共有していない〈よそ者〉表象を日本人に再確認させるように感じることで、心理的葛藤が引き起こされるかもしれない、という予想について、ここまでの考察から、次のように言うことができるだろう。たしかに心理的葛藤は起こりうるが、それは安全を求める自分と被災地という他者の声に応答しようとする超越的視点との間

23) 倫理的自己審問については、ボランティアの持続との関連で述べた『公共的良識人235号』を参照。

にも起こりうるということである。

この意味での心理的葛藤、すなわち倫理的自己審問という形をとる葛藤は、多文化共生社会のための解決すべき課題というよりは、それに向けての新しい希望を示唆している。ここでの倫理的な自己審問は、ある場所そのものに対して、応答しようとする感性である。さらにいえば、日常が破壊された、悲惨な場所が、まさに、日常が破壊され、悲惨であるという、その理由によって、まるで自分の故郷に対するように、無関心ではいられなくなる感性である。

それはある種のトポフィリア（「場所への愛」）のように見受けられる。もっともトポフィリアが「個人的および文化的な一体感と安心感の生き生きした源泉、つまりそこから私たちが世界の中で自らの方向を見定めていく出発点を構成する」（Relph 1976 = 訳1999 : 114 - 5）ものを典型例とするのならば、それとは著しく隔たったものであることも事実である。Cさんはどのような意味でも被災地に対して一体感や安心感を得ることはないだろうし、得るための個人史ももってはいない。被災地との結びつきは、生の「出発点」とはもっとも遠い何かであろう。一方で、Cさんにとって被災地は、まるで故郷のように無関心ではいられない場所でもある。レヴィナスにとって他者はその絶対的他者性によって「私」に無関心ではいられない感性を引き起こすが、ここでは、むしろ土地がその絶対的他者性²⁴⁾によって無関心ではいられない感性を引き起こしているのである。ここにあるトポフィリアは、仮にそう呼ぶことができるとしても、一体感や安心感とは正反対の他者性への感受性に基づくそれなのである。

この他者性への感受性に基づくトポフィリアは、少なくともその意識経験においては日本というネーションの枠を基礎においてははいない。震災以降、日本では「がんばろう、日本」というスローガンが溢れていた。また海外からの日本への賞賛の声がしばしば、日本人自らをエンパワメントするリソースとして用いられていた。さらに日本への海外からの支援に対して感謝する言説もまたしばしば見られた。こうした言説は、それ自体としては何ら排外的ナショナリズムとして批判される要素はない。しかし、一方で、Cさんのトポフィリアは絶対的他者性への感受性に基づくという点に加えて、ネーションというよりは、被災地という極めて限定された場所に対するものである点でも際立っている。要するにCさんの倫理的自己審問の基点は、日本という国家ではなく、あくまで被災地という場所なのである。Cさんのトポフィリアは国家を前提としない。被災地とCさんは国家を媒介として結び合っているのではない。それは無媒介的に直接に結び合っている。被災地の絶対的他者性が無媒介的に結び合うという形である。ここでは、遠さ（絶対的他者性）と近さ（無媒介的結合）が矛盾していない。そう考える限り、震災以降のネーションという枠を前提にした諸言説は、それが非難されるべき要素はないにしても、こうした感性とはすれ違っている、と言わなければならない。あるいは、「冷や水」を浴びせるものだ、というべきかもしれない。

絶対的他者としての被災地と「外国人」との無媒介的な結合は、新しい希望を垣間見せる。

24) ここにある差異は、たとえば日本の中の通常の諸地域の間にあるような特徴や違い、つまり特産物や風景の違いとして語りうるような相対的な差異ではない。

人口減少や産業の衰退、観光客の減少など様々な問題が予想される被災地において、「外国人」——その呼称はもはや国家という枠を超えている限りでは不適切ではあるが——との無媒介的な結合は、仮にそうした人々を復興プログラムの中に積極的に参画させることに成功したときには、重要な人的資源となりうるだろうからである²⁵⁾。

<引用文献>

Bauman, Z., *Liquid Modernity*, 2000, Polity Press = 2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ——液化化する社会』大月書店

Lévinas, E., 1961, *Totalité et Infini*, Nijhoff. = 1989, 合田正人訳『全体性と無限』国文社.

荻上チキ, 2011『検証 東日本大震災の流言・デマ』光文社新書

Relph, E., 1976, *Place and Placelessness*, Pion. = 1999, 高野岳彦, 阿部隆, 石山美也子訳『場所の現象学』ちくま学芸文庫

Schutz, A., 1964, *Collected Papers II: Studies in Social theory*, Nijhoff.

25) こうした可能性の具体的な方策については、ここでは論じることができない。この点については別の機会に考察してみたい。